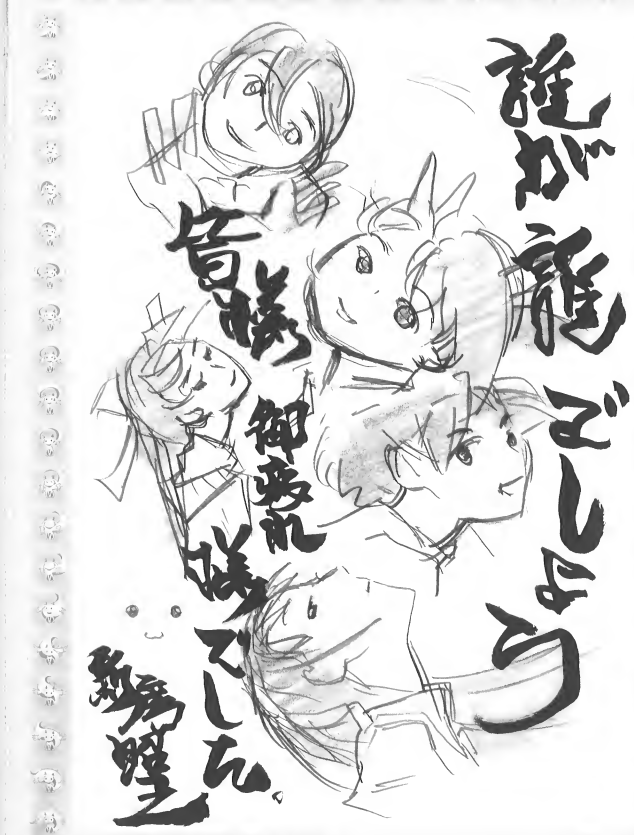
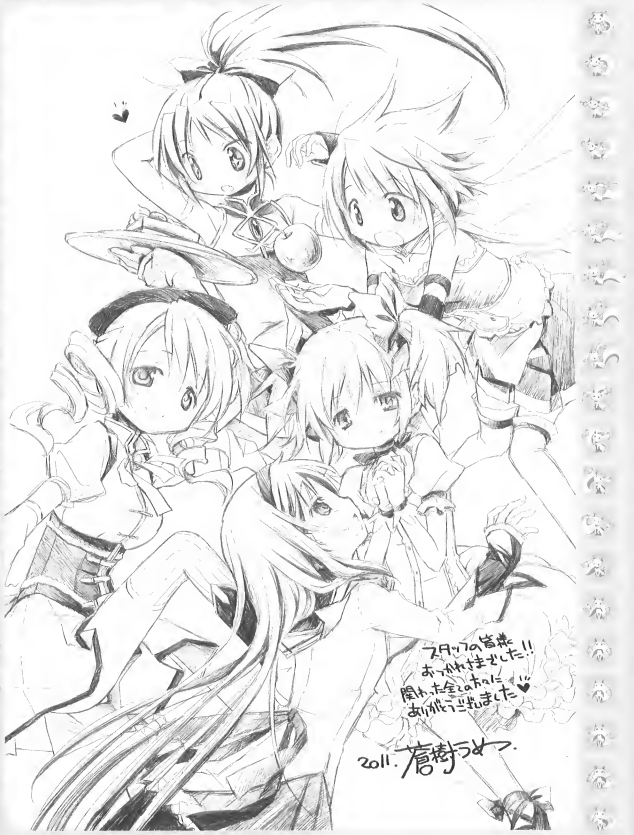
ティロフィナーレ本

ティロフィナーレ本

ティロフィナーレ本


誰が誰でしょう
皆様御参加誠にでしょう。
新房昭之

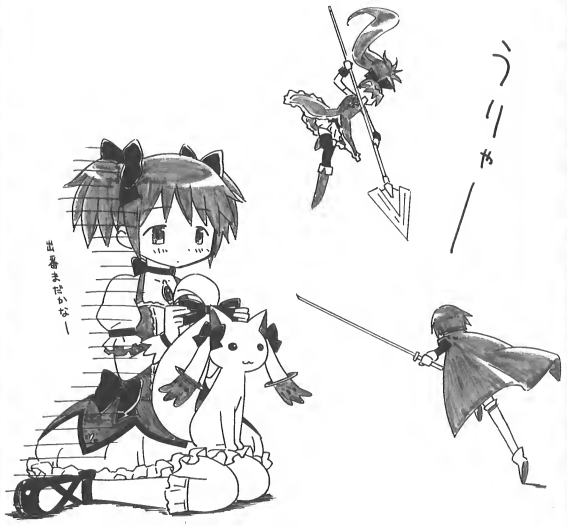
新房昭之


スタッフの皆様
おつかれさまでした!!
関わった全ての人に
感謝の気持ちで一杯です
2011. 蒼樹うめ.

蒼樹うめ

主人公がほとんど活躍しない魔法少女(バトル)物
もなかなか新鮮でした。

タカハシ ミカ



高橋美香

谷口淳一郎

●劇団イヌカレー

今年始めの頃、どこからか口コミで劇団たかるまでを出て行っていた
はずはからやってきてくれた劇団であるのです。　当劇団は
新しもおりません。もはや60名超えの3人に1人は行っ
ちゃです。「ちゃらん人形」へも人気作っている
にもかかわらず、この劇団名ほぼ人形はアメリカ人
ケル・ムーアさまざまかつ平均的世界だけるのです
このアニメは原作をアニメではありません。
自作劇作者アニメです。我々は自らの中を見
匠にによる数々の妖怪をなんとうものです
では、この劇団を知った人間は同じ
ハンストで応援は？
いいえ、それも思いません　劇団そのり
認定することがありのです。
みなさんも者にお会いに劇団
あと、まだかこマモがのびひ

みなさん『魔法少女まどか☆マギカ』を愛して
下さって ありがとう
ございます!
僕個人としても大切な
作品になりましたし感謝感謝
です。

アクションディレクターという役でしたが
ほぼうか銃を使いたいと銃器
担当になってました。
実はもっと色々な銃持たせ
たかったんですよぇ〜
M60とかP90とか
のAUGとかetc…
MINIMIは楽しかった…

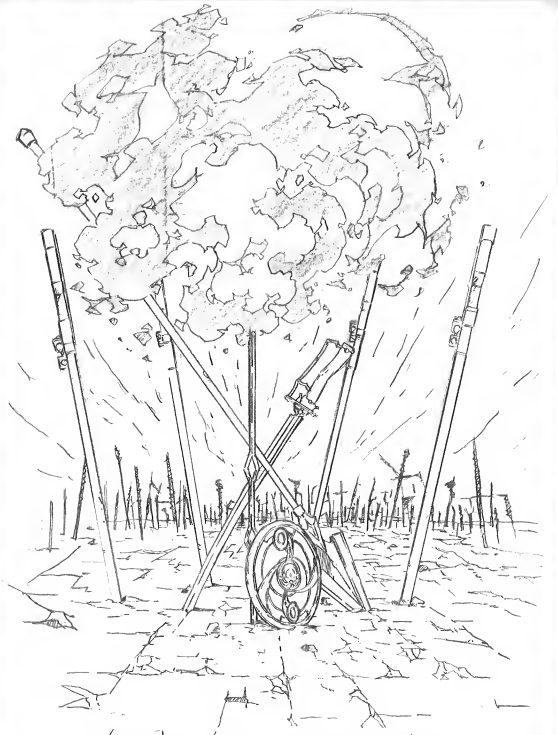
Gという
かんじで僕一人で
夢いっぱいで大。

というわけで
みなさんの心にいつまでも
まどマギを!

アクションディレクター
神谷智大

2011/7月

スナイパーライフル
とかもいいなあ
PSG-1とか
M24SWSとか
SVDとか…
次作で
イイヨネ…



もっとカッコよくデザインしてあげたかった…
もっと活躍させてあげたかた…
本当にありがとう! お疲れ様です!
阿部 望

オオオホホ
まてぇ〜!!
おつかれさまでした。牧

牧 孝雄

なにやら大評判
のようで
なによりです
参加させてもらった作品が
ヒットするのは
とてもうれしいです。
主な担当
鈴木博文

鈴木博文

中村直人

まどか☆マギカ お疲れ様でした

演出 宮本

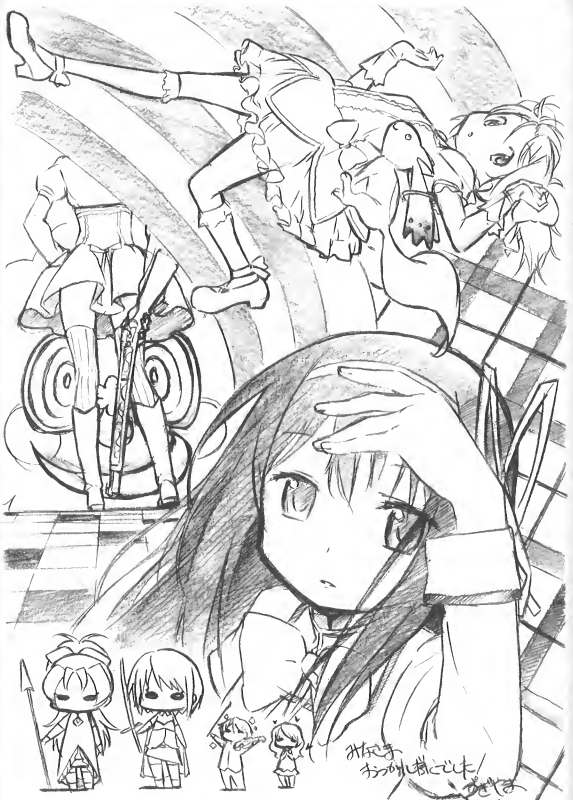
人間30歳をすぎれば人の生死というものが自然と身につくものだと思っていました。

いつも大変で毎回スタッフのソウルジェムが黒く濁っていましたが何とか最終回まで放送できました。
皆様をまどかりと
同じ日に

第七話カフカ的様でした！

宮本幸裕

伊藤良明



杉山延寛

※ 私、マミさんのアクション一番好きでした。
いただきました。
いつも大変なスケジュールの中、それでも
完成にこぎつける マジックには毎回
驚きを覚えます。
スタッフ皆様 本当に
お疲れ様でした。

村山公輔

魔法少女で
一人だけ描いて
いなかったので
マミさんを
なんて
メッドー
仮なんだ
もっと
出番が
あれば良かった
のに。
まどか
原画としては
楽しく
やらせて
いただき
ました。
お世話になりました。
岩崎

岩崎安利

ご
ショルダーバッグに
隠しカメラ
全話
ストーリーの
山村洋貴

山村洋貴

2011.6.30
Puella Magi
Madoka Magica
お疲れ様でした。
高野晃久

高野晃久

お疲れ様でした。
楽しく参加させていただきました!!
本当にありがとうございました。
潮月

潮月一也

阿部厳一朗

松本元気

今村 亮

江畑諒真

この作品には、製作の岩城さんの誘いを受け、
参加することになりました。
今は「First Squad」や「ThunderCats」などの海外向けアニメーションを
やっています。またこんな作品に携わりたいですねー。是非、また呼んで下さい。　芦野芳晴

芦野芳晴

「まどマギ」お疲れ様でした。

原稿を描くために セキュリティ万全な
シャフト制作部からキャラ表をコピーしてきました。

あと、細かい所は 本編あってないので
調べてください。

この頃に キュゥべえ 描こうとして 挫折…。

ちなみに
「まどマギ」って
言いにくくないですか？
スタッフは 皆
「まどか」って言ってましたよ。

電波の仕事のせいで
どうしても お尻や
ふとももを
描いてしまう…。
自分の趣味では
ないのに…。

板村智幸

板村智幸

スタッフの皆様 お疲れ様でした！
すばらしい作品に参加させて頂きありがとうございました！
11話 コンテ ＝ 伊藤智彦

伊藤智彦

笹木信作

Tatsuya Oishi 2011

尾石達也

♦PUELLA MAGI HOMURA★MAGICA♦
2011.7.19
♦PUELLA MAGI HOMURA★MAGICA♦
♦PUELLA MAGI HOMURA★MAGICA♦

守岡英行

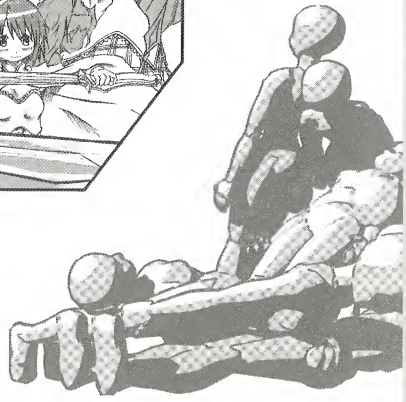
梅津泰臣

MEMO

お疲れ様です
皆様、まどかの本お買い上げありがとうございます。

自分、全然まどかにかかわっていないのですが、何故か描かせてもらっています。
地震があり大変な時期だとは思いますが、皆様、まだまだＤＶＤやＢＬＵ－ＲＡＹ発売がひかえていますので、もう少しだけおつきあいください。

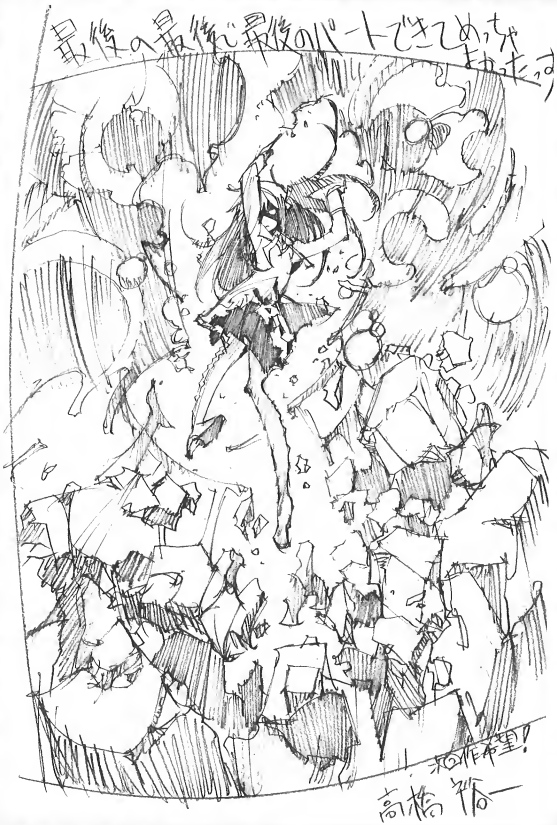
では、またどこかで…



©NANIMOYATTENAINONI KAKASARERUNANTE IMIGAWAKARANAIYO. CO. JP

龍輪直征

りょーちも



高橋裕一

滝山真哲

沓名健一

メロンパン 158 円の助

小俣真一

まどか10話は自バコオと泣く。
TV放送みて泣く。
テキーラの会開に
BD回りライク出しで泣く。
涙目でしかみれないよ—。
『わけがわからないよ』

私はキュゥべえ派
色彩設計 滝汰いづみ

キュゥべえと契約したわけでもないし、少女でもないですがよい夢みれました。
みな様お疲れ様でした。
ありがとうございます
制作 えび澤

杏子ちゃんマジ杏子
VE 酒

とても良い仕事に恵まれた作品でした。
お手伝いいただいた
全ての方に感謝してます。
制作 鈴木

超常現象とかもっとずばり魔法がぽえ子らしいです。
楽しみです。 VE 鏡。

お疲れ様でした！
改めてアニメってすごいなと思います。。。
キャスト・スタッフ、この作品に触れて頂いた全ての皆様ありがとうございました!!
#1 制作進行 勅田由実

初担当にカラルナがエンディングで大興奮!!
皆さんありがとうございました。
マミさんに射撃を教えてあげないで
(マミさん派) 制作嘉保。

この作品にかかわる事ができて本当に良かったです。
ありがとうございました！
(ミリ軍曹)
ビュンビュンとスフィア ソン
もう何も恐くない。

皆さんおつかれさまでした!!
大変だったね。
でも心に残る作品になりました。
また同じ仲間、新しい仲間でよい作品を作りましょう。。
指定渡辺
自ベんまじょが食べたい。

はいっ
けーやく
うてっかっ

続きが気になってコンテをいきに読んだ作品は、まどかがはじめてでした。お疲れ様でした!!
色指定・佐藤

魔法少年がいてもいいと思う。
通信空五年
おもしてホントばか

僕はなにもしてません。
岩城様、申し訳ありませんでした。
でっけガ

イトコ、私、魔法少女になる。帯広

「辛かった」の一言でしたが、終わってからは「やりとおした」と思えるようになりました。
志恩たんもうらら泣かしても少女らしくうまれたてしい男。
社会人のくせに仕事を辞すことなくできるS良いです。
1話のアレにぐりぐりでもデブの母を愛する CG制作 澤砂

自分たちで力がまれば」と何度もBDをお願いしますになりましたが皆様のおかげで辿りつけました。
ありがとうございました！
(杉)

Madoka,
while we remember you,
you are not alone.
設定 青葛

皆様、おかげ本当に、楽しい作品でございました!!
岡田

とても楽しく作業できました!!
メガネほむほむ最高～。
日比野

みんなかっこいたぁ～
(ほぶく)
8話(遠藤) いい回

とってもとってもほむほむしたほうがいいです。

(秋) 本編完成、ゆっくり休んでください。

とても良い経験が出来たと思います。楽しかったです。
撮影 廣藤

この作品 なんかTVの始回。
もう皆。 ソクセラ
「内容、課題性ともに印象深いはお昼！
希望が絶望に変わる前に、早く円環へ導さんか来てくれなかった！
城最盛期
三ツ橋。

作品でした。 演技勉強にもなりました。
気になりながら作業していました。
吉岡

は？ワルプルギスの夜なら俺の後ろで震えてんだけど？
(西)

おもやせ西のシーンをよく覚えしてる。
見ごたえがあり、バス停かに始まり、
人として終えました。
江藤佐

まで、かは一つ成長できた作品です。
ありがとうございました。
俺はさか派 撮影 土屋

新居昭之様
ブランドを作ってしまうなんて
スゴいです！

石浜真史

残暑お見舞い
申し上げます。
Zansho omimai
one more Summer.

2011.08

亀井幹太

10話を見た時、胸がキュウキュウしめつけられました。

長年の友人であるアニプレ谷上さんが、新房監督とシャフトと、また スゴイ作品を作ってくれたナ〜と、歯ぎしりする思いで放送を見ていました。

参加できなかったのが、悲しすぎる…。

見たら語らずにおれない、そんなSFマインドと、熱気に満ちたフィルムでした。

スタッフのみなさま、本当にお疲れ様でした！

「2011年の空気」を封じ込めたような作品でした…。

小松田大全

最近、キュウです…。

小松田大全

大傑作SFアニメ!!
『魔法少女
まどか☆マギカ』
なんか主人公ぜんぜん魔法少女に
なんないなとかぼーっと観てたら
いきなりシリアスな展開に! 死*は
出るわ、キュゥべえは怖いこと言い出すわ
なんど! ほむらちゃんが実は!! しやー
鳥肌された たまげた。SFです
ハードです傑作です!
吾妻ひでお
'11.7.17

吾妻ひでお

私と契約して
魔法少年に
なってよ!!
意外ですねえ。
たいていの男子は
二つ返事なんですけど。
こりないのねえ。
その気になったら
お私のの準備はけーです。
わけわかんないー!!
男の子ってなんでいっつもそう。
本当のこと知るとどうして怒るのかしら?
2011.7.某日
椎名高志
そこ神経細胞の集まりですよ?
えんとろぴーを
りょうがしてくださいっ!!
スケキな作品。
おいがとうございました!!
BD買いました。

椎名高志

おみおみ

サリーからまどかまでの距離

辻 真先

テレビアニメの魔法少女もの第一作は『魔法使いサリー』で、ぼくもその一部の脚本を書いている。子供向けに平易に『魔法』と開けば誰もが連想する内容のシリーズであった。その後も『アッコちゃん』『マコちゃん』『メグちゃん』といくつものシリーズを担当したが、土俵の色合いは多少変化があっても、大きさはほとんど変わることがなかった。あれからもうなん年たったのだろう。ぼく自身数え80歳になったのだもの、人変わり世の中が変わりアニメも変わった。当然といえるだろうが、しかし。

『まどマギ』第一回のトップシーン、スタイリッシュな画面構成を見せられて、ああ新房演出だなとのっけから思わされた。だが話が進むにつれて、シリーズを支える一方の虚淵脚本の力を見せつけられてゆく。一カットもゆるがせにしない新房演出は、見事なだけにガランドウの人工美を露呈する恐れもあるが、そこにシナリオの充実した劇空間がみっしりと詰まって、キャラクター同士の息詰まるせめぎ合いが連続するから密度は濃い。

畷渋な展開でも独善的な台詞でもないのに、旧来のスタッフと視聴者との出来レースを脱して、土俵際ぎりぎりまで格闘をやめない。その真摯さが見る者を画面に釘づけする。大人はしばしばいう、「寝た子を起こすな」。トシをとれば否応なく死の不条理とむきあうことになる。せめてそれまでは眠らせてやろうというのが、これまでの考え方であった。あいにく二十一世紀のいまは、ラジオも新聞も入手困難であった昭和前期のニホン村ではない。村長さんや校長さんの知らない間に、子供はとっくに起きている。叱られるのがイヤだから、寝たふりをしているだけだ。そんな若い視聴者に正面きって向き合い、魔法少女というコスプレをふんだんに使いながら、容赦なくこの世の真実の一面を語り聞かせる。ほんわかと目に馴染みやすいキャラクターを逆用して、したたかな計算の下に苦みのきいたドラマを提供する。ラストに置かれたSF的な規模雄大な真相は、みごとな説得力を体感させられた。クリエーターとしてそれなりの覚悟があってこそ、高い完成度を達成したのだと、あらためて敬服する。

価値観のせめぎあいが現実味を呼ぶ『まどか☆マギカ』

氷川竜介

『魔法少女まどか☆マギカ』については、雑誌『メガミマガジン2011年8月号』（学研）付録に長文を寄せた。本当はもう少し個人に引き寄せた視点で書くはずだったが、文字数や納期の関係であちこちカットしつつ、なるべくシンプルにまとめてみた。こちらではそのとき落とした部分を拾いながら、思いつくままに綴ってみたい。

本作で非常に印象的だったのは、いつしよに観ていた家内の反応である。そもそも魔法少女も美少女ゲームも日常系アニメも、ほとんど興味をもたない人である。アニメに偏見こそないが、つまらないアニメだと思ったら3分以上は絶対に観ない、そんな家内がものすごくのめり込み、「早く、次！」と叫んでいたのである。これはやはり「美少女アニメを超えて興味をひくものがある、普遍的に琴線に触れるものをもったアニメだと思ったのはそういう理由だった。

さらに放送終了後、これまた萌え系美少女アニメにあまり縁のない仕事関係者が「まどか☆マギカって面白いですね！」というメールを送りつけてきた。そこではひとりの脚本家が書いたオリジナルという部分を高く評価し、そして「これって、まだまだ火がつきますよ」と付け加えられていたのである。はたしてその予言は的中し始めた。この6月あたりから、各所でビッグネームが「おもしろい！」と発言したり、「キュウべえ」のぬいぐるみを探したりする話が伝わってくる。

最終回オンエアから約三ヶ月。たしかに第二波はこれから始まる予感もする。それはこの夏のコミケで確実になるはずである。

『まど☆マギ』には確かに「オタク文化」の総決算的な部分もあるにしても、自分の関心事は、むしろそうした流れにまるで興味関心のない人間たちの心さえとらえるのは何故か、ということだ。要素が山盛りの作品だから、時流に合致する部分集合はいくらでも見つかるだろう。だが、むしろもっと時代を超えて古典になり得る可能性にこそ注目したい。

たとえばこの言葉は不適切なのかもしれないが、生きるものの苦しみを和らげる「宗教」を思わせる要素そのものとうである。『まど☆マギ』で主に問題にされているのは人の心や感情であり、人が人である根元は時代を超えてそれなのだということが、きちんと描かれている。心がある限り生きることは苦しみや哀しみの連続でもあり、絶望を否定してどう乗り越えるかと提言だけでなく、それを受け止めて「ともに生きていく」という最終回で描かれる「奇跡」の落着点は、2011年なりの回答だとも思った。

アニメという表現は、実はそうした「生」にまつわる根元的な主題をとき澄まし、奇跡を描くことに向いているヤマト、ガンダム、セーラームーン、エヴァなど、過去大きなエポックメイキングとなった作品も、どこか似た要素、つまり不可能性を可能とする奇跡の所在と、人の生死との関連をめぐって物語る接点をもっていた。

なぜ向いているかと言えば、実はアニメの画面中に登場する被写体とは錯覚で「死んでいる」わけで、それを「生きている」と錯覚して感動すること自体が「奇跡」だからである。『まど☆マギ』で描かれているような、一般的な「生」とは違う状態になってまでも戦いぬいて、傷りかもしれない生を主張する魔法少女たちの姿は、その点でもシンクロしている。

アニメキャラという幼体成熟的な意匠で語られるところも、奇跡を信じる興味を抱いているところである。もし何か起きるとしたら、次は「謎外国」ではないか、その時、どういう世界が見えるのか、非常に楽しみだ。

一方で、拡大する中にはネガティブなフィードバックも当然あり得る。評判を聞いて見始めたある人が「鬱展開」と言って斬り捨てていたのも、すでに見かけた。

これにちょっとした違和感を抱いたのは、『まど☆マギ』の魅力のひとつに、「現実世界の投影モデルとしてよくできている」ということがあるからだ。現実に物事を進めていくときに、よく注意すればあらかじめ回避できたことが、なぜかできてなかったり、思い込みで夢を見すぎてしまった！と後悔することは、実によく起きる。昨日だって起きたし、明日だって起きるだろう。

そういう状況下では、まじかや魔法少女たちが体感しているのと同種の、ギリギリと追いつめられ、逃げ場のない不安のような感覚にとらわれる。だが、それは真摯に生きようとすればするほどぶち当たるような壁、作用に対する反作用だと思うようにしている。フィクション世界にまでそんな現実感あふれる苦い味は要らないと目をそらしたりするのも個人の自由ではある。だが、だからと言って「鬱展開」と決めつけてレッテルを貼って思考停止するのは、もったいないなと思った。

「子どもが間違って観たら？」という意見も見かけたが、それも何か違う気がした。自分自身、7～9歳ころは漫画やテレビの放つ毒からトラウマを受け続けた日々であった。間違えるも何も、こっそり見ようと思えば青年や大人のものは見られたし、逆にそれで耐性ができて、少しはふとくなっているはずだと思っていた。

たとえば60年代後半、最初のテレビアニメ版『ゲゲゲの鬼太郎』を放送して

MADOKA★MAGICA

に足るものとするためのポイントだ。筆者はこれを「あしたのジョー」における「クロスカウンター理論」と考えている。矢吹丈は両腕ブラリのノーガード戦法で敵を誘いこみ、その瞬間にカウンターパンチを出して倒す。しばしばアニメはアニメ実写に比べれば具体的な実存の根拠をほとんどもたないキャラクターだろ？　と、観客はガードを下げる。そこに生じたスキをめがけ、観るものの胸に突き刺さる必殺のカウンターが飛ぶ。

『まど☆マギ』の喜ばうめによるキャラクターデザイン、新房昭之監督という布陣の初期の発表で、大半のアニメファンは「ゆるい日常系深夜アニメがまた1本」と考えたはずだ。そのスキに飛んだ最初のパンチを評するネットの言葉が「血だまりスケッチ」とは、実に言い得て妙であった。

だが筆者にとって、本当に心の奥深くえぐり込むように決まったカウンターはこの作り手は本気だ」という「気分」だった。すっと周囲の現実が消えて、アニメの中へと引き込まれてしまう独特の体感。そこで際だつアクションや幻想的なイリュージョンは実に不気味であると同時に美しい。この「同時」というところがやはり急所である。色彩や明暗の変化とともにそれを感じる自分は「ああ、生きている」という手応えを得つつ、美を感じる対象の魔法少女の正体はゾンビに等しい存在という背徳的な罪悪感も同時に覚える。そんな何重にも積み重なった倒錯が、官能にふれる。

こうした現象は非常に言語化しづらい。当たり前の話で、言語化しづらいエリアだからこそアニメという表現手段が選ばれているわけで、その手強さも魅力のひとつに数えたい。どうやら作り手の方も予想を超えた反応となっているようだから、簡単に結論が出ないところも含めて面白がった方が、当面は良いのではないか、そういう意味でも、まだまだこれから、なわけで、いろんな人がいろんな立場で考えを述べていく展開と、そこから見え始める次の地平にも

MADOKA★MAGICA

いる時期には、理髪店に行くと貸本屋流れの『墓場鬼太郎』が山積みになっていた。目玉がくりっからすとっと落ちたり、生きながら身体が腐るグロテスクなホラー描写を目撃するたび、ああ、世の中ってこうした二重構造になっているのか。隠しごとする大人ってずるいな」などと思った記憶もある。だから21世紀になって日曜の朝に並ぶキャラみたいにクリーンな絵柄となった新作『ゲゲゲの鬼太郎』をやっていた時期に、深夜インタミナ枠で『墓場鬼太郎』が始まったときには踊りあがらんばかりに喜んだ。世の中捨てたもんじゃないぞと。

お父さんが録画した深夜版をうっかり間違えて観たり、あるいは『本当の鬼太郎』をやってるらしいぞ」と聞きつけて『墓場バージョン』を体験した子どもの何人かは、さらに貸本版にさかのぼり、「本当の『こと』に気づくだろう。その『選ばれた子ども』は固定観念にとらわれず、日本の将来を変革する人間に育つかもしれないから、これは楽しみだと。

実は『まど☆マギ』現象が拡大していく時期に覚えた感覚は、これに近しいものだった。実際、世の中はそういう風に『溜潤あわせ飲め』みたいなことで回っているわけだから、自分の目で観察し、自分の頭で考えて真実を探求することに価値が宿ると早く気づいた方がお得だ。

大震災などを含めて、いろんなことが節目になっている時期に、そうした知恵を触発する作品が登場し、しかもそれが大ヒットしたということは、本当に喜ばしい状況である。

こうしたことをあわせ考えても、『まど☆マギ』の価値観の多元的、重層的なものがせめぎあう世界観の現実味、つまり『ウソのない状況』は非常に魅力的だと感じる。それが『魔法少女もの』なり『ループもの』なり、既出のシンプルなモデルのかたちを借り、様式の力を得て、たったワンクールという短い尺で征服欲さえなく、他の生命を滅亡させようとするザラブ星人。そして言葉巧みに『契約』で子どもに地球を売り渡させようとするメフィラス星人などなど……。こうした価値基準が根底から合わない異種族との接触は、必ず悲劇をもたらす」方で、『現実にあり得るもの』としてのリアリティも同時にそなえていた。

キュウべえとの『契約』に内在する断絶と苦悩は、こうしたSF映像文化の中で連綿と描かれてきた異星人とのコンタクトの系譜の中にも位置づけられる。

少年時代の記憶という意味では『現実感が引き裂かれる』という『まど☆マギ』の味わいには、連想される作品がもうひとつあった。それは筆者がかつて14～15歳だった頃、『週刊少年マガジン』に連載されていた永井豪の『デビルマン』である。

同作の途中、不動明は舞台装置のようなメタな雰囲気でいったん物語の中から離れ、急に読者に向かって語りかけを始める。それがデーモン族との最終決戦の幕開けにつながっていく。

発端となる事件は不良少女ミーコに起きる異変だ。悪魔側からの強制合体で身体がおぞましいものに変化したミーコは、自制的な思いに囚われ、不良仲間の元友人を溶解液で殺してしまう。以後の際立った緑的なすさまじい展開が、自分の問題として目が離せなくなるのは、このイントロのもつイヤな吸引力のせいである。中学二年生だったはずの筆者は、ミーコのエロとグロが合体した身体に格別な感情を覚え、あまりの臨場感に溶解液の殺害シーンでは強酸の悪臭の幻覚を体感したほどだった。

『まど☆マギ』で魔法少女たちの身体の秘密が明かされるエピソードでは、この酸鼻な体感がよみがえってきた。53歳でそれはないだろう！と自分が恥ずかしくなるような経験でもあったが、それくらいの力を感じた作品だということで、嘆いていただきつつ納得していただければと。友人が、「美樹さやかとは牧村美樹（デビルマンのヒロイン）に『さやか（マジンガーZ）』の合体で、『ほむら』は『炎ジュン（グレートマジンガー）』、『巴』は『巴武蔵（ゲッターロボのパイロットで最初の死者）』と言い出したとき、速攻で納得したのは、矮小な元ネタ探しに興味があったわけではなくて、『やっぱり』な的な得心があったからである。

いくつかの正しさが併走する中で、自分はどうしたらいいか分からない、そんなまじめかのような惑みを個々人が抱え、圧倒的な現実の前に立ちすくむような時代である。『まど☆マギ』は、祝福が呪いに変わるという、それもまた現実的で非常にイヤな真実が中心に置かれてはいる。だが、だからこそ逆転の奇跡も可能であるという、あまりにもストレートな真実を描くための手段でもあったのだろう。人はいまこのとき、いま目の前にいる人、関係のある人のかけがえのなさをこそ思い、やれることを行動すべきだということは、去年から今年、多くのかけがえのない人を喪った自分には心に響くメッセージだった。

そんな感謝をこめつつ、このとりとめのない文章を終えることにしたい。

怒濤のようなドラマとして流れていく。その凝縮度が観客の体験そのもので、どこかには必ず引っかかって、目が離せなくなってしまうのだと思う。その流れの勢いこそがもっとも大事な部分なのだろう。

ここで『価値観のせめぎあい』と言っている最大のものは、キュウべえと魔法少女とその候補の一団にある葛藤、コンフリクトであることは、言うまでもない。

そもそも価値観のキャップによるカルチャーショックは、人類の歴史上、幾度となく繰りかえされてきた。人の価値観は、『理』と『情』のコンビネーションの中から生み出されるが、『情』の問題は振れ幅が大きく、共有が難しい。だから法律のような『理』で行動を律するわけだが、この『理』は大前提が違えば、もっと根本的なコンフリクトを起こすような性質をそなえている。だから征服者は『理』の根幹につながる言葉を奪い、名前を奪ったりする。

島国に住む日本人は同質性を信じすぎて、こうした基盤となる部分に差違があり得るという認識が薄い。そこに対しても、実はアニメや特撮の先達は知恵のヒントになるような事例を多く提示してきた。『まど☆マギ』のキュウべえとの会話は、受け入れがたい違和感を喚起し、正論を言っているはずなのに、前提がズレているから深まる溝は、逃げ場のない恐怖心さえ呼び覚ます。だが、その感覚もまた私の少年時代の原体験の記憶を喚起し、そこでも嬉しくなった。

たとえば科学万能時代だった1960年代のテレビ特撮『ウルトラマン』では、来るべき宇宙開拓時代という前提で、異星人とのコンタクトのかたちをとって、何度かそうしたカルチャーショックの様相が描かれている。

生命という大前提の概念をもたないバルタン星人一群体としての意識しかない）、『そうするために生まれてきた』『仕事だ』というだけで、恨みも怒りも

MADOKA★MAGICA

魔法少女たちに永遠の花束を

藤津亮太

1、魔法少女はどこから来たのか

「ジャンル映画とは何か 強調すべき第一点は、ジャンル映画とはハリウッドの大量生産システムから生み出される大衆消費財だったということである。それはフォードやトヨタの工場の自動生産ラインに乗って運ばれてくる車のように生産され、消費された。好むと好まざるとにかかわらず、ハリウッドは一定のパターン（それは〝好み〟に応じて頻繁に変化しないわけではない）に基づいて自社の製品をつくりつづけ、観客はそれをそのパターン条件下で享受しつづけた。パターンのこの反復可能性が継続的な大量生産／消費を可能にする。そしてパターンゆえに、生産者側も消費者側も自分たちが何を売り、そして何を買っているのかはっきりとわかっていた。ジャンルの生成と発達は法定拡大を目指す産業の必然なのである」

――「映画ジャンル論　ハリウッド的快楽のスタイル」（加藤普章、平凡社）

『魔法少女まどか☆マギカ』は、「魔法少女ものの一つ」として変格な作品が、視聴者との関係を取り結ぶために、その不透明な立ち位置を明瞭にする目的で、「魔法少女」を率先して名乗る。それはずいぶんとアクロバティックな転倒だ。

だが現代にあって、「魔法少女」を名乗るということは、このアクロバティックな転倒を自覚することにほかならない。だから、「魔法少女と名乗っているにもかかわらず、魔法少女ものではない」といわれてしまう『まどか☆マギカ』は、「魔法少女もの」の歴史に鑑みて実に正しい。

「まどか☆マギカ」の立っている場所はそのような場所なのだ。

2、魔法少女から魔法少女へ

「ある願望があって、それも願わくは妄想的でも凡でもない強烈な願望があって、それをどうしても達成しようとは思わないではいられないやはり強烈な性格の人物がいる。そして彼は主事にその願望を達成するのだが、それを達成するということには、同時に彼がまさにその上に立っている基盤そのものを見事に破壊するのだというそういう感じの存在。マイティブル王」から「人形の家」まで、すべてた戯曲のどうだいていうのは、この原理の集約点がふまりドラマのクライマックスである」

――「ドラマとの対話」（木下順二、講談社）

では魔法少女ものの歴史の続編で生まれた「まどか☆マギカ」は、かつて世に出た魔法少女たちからまったく綺がいいだろうか、いやけっしてそうではない。たとえば変身して華麗な戦闘服になるというパターンは、「セーラームーン」以降の意匠だ。

だが、注目すべきはそうした表層ではない、過去の魔法少女とまどか☆マギカとをつなぐ太い線だ。本稿で重要なのは魔法少女となるヒロインたちの〝願い〟の描き方だろう。

たとえば美樹さやかは、幼なじみである上条恭介を助けたい一心から魔法少女になるべく、魔女と契約をする。恭介は将来有望なバイオリニストだったのだが、事故でバイオリンを弾くことのできない体になってしまったのだ。

魔法少女となったさやかの願いは叶い、両腹が絶望的と思われていた恭介の手は再び動かせるようになり、バイオリンは音色を取り戻す。退院もできるようになり、学校へも登校できるようになった。

さやかの病院で、一緒にCDの音楽に耳を澄ませたあの密かに甘い時間はもう戻ってこない。そして恭介への思いを素直に告げる恋敵も。

夕方の病院で、一緒にCDの音楽に耳を澄ませたあの密かに甘い時間はもう戻ってこない。そして恭介への思いを素直に告げる恋敵も。

願いを叶えようとすると、かえってその願いが遠のいてしまう。そこから生まれる鬱屈が劇作家の木下順二は「劇的」と呼んだが、「まどか☆マギカ」の少女たちは、「契約によってまさかの逆説に飲み込まれ絶望に至ったのだった。

巴マミは、「生きなければならない」ことを願った結果、命をかけて魔女と戦うおそえなくなるという、「生きなければならない」ことを願った結果、魔女と戦うおそえなくなるという、「生きなければならない」ことを願った結果、命をかけて

結婚した主人公・森沢優の姿で飾るということにつながる。

そして1985年の「魔法のスターマンカルエミ」になると、この「成長」がテーマとして物語の中に積極的に取り込まれる。

『マジカルエミ』は、小学生の女の子・香月舞が、鏡の妖精トポに願いの叶う魔法をもらい、16歳の天才マジシャン・マジカルエミとなって芸能界で活躍するストーリーだ。

物語の終盤で舞は、自分がエミとして活躍することにある種の欺瞞を感じるようになる。魔法の力で天才マジシャンになってもそれは〝嘘〟ではないか。エミもまた、魔法によって夢を手に入れることで、自分が夢から遠ざかる逆説の中に身を置いていたのだ。そしてそれに気づいたために、舞は、自分の意志で魔法を返上し、下手だけれど自分のマジックを演じようとする。

夢を叶える魔法には、実は自分を夢から疎外するものでもある。

この魔法のパラドックスに自覚的であるという点で――そしてそのパラドックスがドラマの中核をなしている点で――『マジカルエミ』と『まどか☆マギカ』は一本の線で結ばれている。

3、古典的な仕掛け

「女のある者は敗残者ではない」

――一条暗らむき哉・人生十二

『まどか☆マギカ』がクライマックスへ向けて大きく舵を切るのは第10話にもう誰にも頼らないだ。

第10話は暁美ほむらが視点人物となって、物語のいわば種明かしが行われるエピソードだ。そこでは、かつてほむらが、まどかたちに導かれて魔法少女となったこと、ワルプルギスの夜と呼ばれる魔女の登場によってすべてが失われたことが明らかにされる。

ほむらはその絶望的な状況を前に、自らに宿った時間の巻き戻し能力を使う。そして出会った日まで時間軸を遡り（正確にはこの時点で世界の時間軸が分岐するため単なる〝遡行〟ではないのだが）、ワルプルギスの夜が現れるまでの約1カ月間を、まどかが救われる未来を求めて幾度も戦い続けることになる。

在化させて、魔法少女となり概念となるまどかを見送ることになる。

「ループ」というアイデアは、ほむらと視聴者の視線を重ね合わせるようにするというストーリー上の重要な転換点を可能にするという点で、非常に巧みに用いられている。

たとえば、美少女ゲームなどで「ループ」の仕掛けをもった物語が存在しており、第10話で描かれた「ループ」を「ゲーム的リアリズム　動物化するポストモダン2」（東浩紀、講談社現代新書）など補助線として読み解くことも可能であろう。その時、「ループ」からもたらされる叙情は「ポストモダン的な状況に生きる人々の生の実感をすくいとったもの」として考えられる。

ただここでは「ループ」の仕掛けを、視聴者をキャラクターの生に立ち会わせ、感情移入を可能にするための古典的な道具立てとして考えたい。

それは、自殺を試みようとした男が、自分のいないもう一つの〝不幸な〟世界を垣間見て（当然、このもう一つの世界を見ることができたのは本人だけだが）、〝現世へと帰還する〟素晴らしき哉、人生！〟の仕掛けと同じ種類のものだ。

「まどか☆マギカ」はそういう受け止め方ができるくらいには、「最先端」というよりも「古典的」な作品なのだ。

4、魔法少女の中の〝少女〟

「魔女との戦いがどういうものか、その目で確かめてみればいいわ。その上で、危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えて見るべきだと思うの」

――巴マミ

第一話「夢の中で逢った、ような……」は夢の中でまどかがほむらと出会うシーンから始まる。このシーンが象徴するように、まどかという少女は「見る」キャラクターだ。

まどかは、まず「傍観する」。友達のさやかが魔法少女となっても、先輩のマミを failed しても、まどかはなかなかキュゥべえと契約をしない。ただの普通の少女として、ほむらの魔法少女たちの苦闘に立ち会う。

どうしてまどかが傍観するしかないかといえば、それは彼女に動機がないからだ。

もちろん、ほむらもまた、魔法少女のパラドックスとは無縁でいられない。望まない未来を突き当たるたびに同じ時間を繰り返した結果、そのたびに生じた平行世界の数がまどか単体の最大値である魔法少女にして魔女の最大値となる素質を与えることになってしまったのだ。

このほむらの〝絶望〟こそが「まどか☆マギカ」のクライマックスを劇的に盛り上げることになるが、一つ注意したいのは、そのほかの3人の魔法少女たちの抱えた逆説とほむらのそれは異なる点があるということだ。

第10話はそれを〝体がばらばらになった〟ほむらの記憶という形で語られたエピソードとして描いた。だがほむらの記憶とは、ここで語られたエピソードに限らない。

そのほかの魔法少女たちと違い、ほむらの場合は、別のキャラクターへの説明・告白という体裁で語られ、その想いは別のキャラクターと共有されていた。だが、ほむらの想いは誰とも――視聴者を除いて――共有されていない。

視聴者だけが知る登場人物の秘密、それは視聴者に、その登場人物の人生に立ち会いたいという感覚を強く抱かせる。それは視聴者の中に強いエモーションをかき立てることにつながる。

わかりやすい例をあげよう。

「ローマの休日」のラスト、アン王女（オードリー・ヘップバーン）と新聞記者ジョー（グレゴリー・ペック）が記者会見で顔を合わせる場面。ここでは観客だけが、2人が既に想いを通じ合っていることを知っている。だから、その想いを表に出すことなく会話する2人の姿に心が揺さぶられる。

第10話を見た視聴者はほむらの秘密を知り、それによって彼女の人生に立ち会うことになる。それはほむらの視線を視聴者自分のものとすることでもある。その時、謎めいたキャラクターだったほむらが、感情移入可能なキャラクターとして視聴者の胸の中に立ち上がる。まどかを救いたいという願いを胸に孤独に戦い続けてきたほむらの想いを、視聴者は我がことのように感じるようになる。過去の魔法少女たちが、自分が魔法を使う代償に支払った、視聴者と共有していたことを思いだしてほしい。

ここで視聴者は、まどかの視線で見てきた第9話までの物語を、一段高いほむらの視点で眺め直すことになる。そしてこれ以降、視聴者はほむらの視線を内

第2話「それはとっても嬉しいなって」で、先輩の巴マミに従って、魔法少女見習いに出かける時、まどかは自分が魔法少女になった時のコスチュームを絵に描いて持ってくる。動機を持たないまどかが、魔法少女をとらえるのにその外側からアプローチするしかないのだ。

ここでふいに思い出されるのは『機動戦士ガンダム』第41話「光る宇宙」で、主人公アムロ・レイに向けられたセリフだ。

「なぜあなたはこうも戦えるの？　あなたには守るべき人も守るべきものもないというのに」

このセリフを口にしたのは、超感覚を持ちニュータイプと呼ばれる少女ララァ・スンだ。

彼女と出会い急激にニュータイプとして覚醒をとげるアムロは、意識の中でララァと会話し、戦うための〝動機〟の不在を指摘される。

アムロは父とも母とも別れ、どこにも居場所を持たない〝デラシネ〟だ。彼は生き延びるために降りかかる戦いに戦い続けて、戦争の中核と入り込んでしまった。そしてアムロは、ニュータイプとして開眼することで、最強の戦士へと成長する。

ララァが問うたのは、その〝動機をもたない普通の少年〟と〝最強の戦士〟が共存する奇妙さだ。

まどか自身も〝動機を持たない普通の少女〟であり、同時に〝最強の魔法少女（魔女）になる可能性〟を秘めている。まどかは、アムロと同じ二重性を抱えているのだ。

アムロの場合、〝最強の戦士〟の物語はSFとして締めくくられ、〝普通の少年〟の物語はビルドゥングスロマンとして語られる。この2種類の物語が織り合わさっているのが『ガンダム』という物語なのだ。

具体的にいうと、最強の戦士の物語は第41話〝光る宇宙〟で、ララァとともに未来を幻視し、脱出へと帰還することで完結する。また〝普通の少年〟の物語は最終回〝脱出〟で、ニュータイプの能力を使って仲間たちを戦火から救い、仲間のもとへと帰還することで完結する。

「ごめんよ、まだ僕には帰れるところがあるんだ。こんな嬉しいことはない。わかっ

MADOKA MAGICA

てくれるよね。ラファにはいつでも会いに行けるから」。

仲間のもとへと戻るマミのかっこよくこのセリフが、第4話の「守るべきものがない」というラファの問いに対してアンサーとなっていることはもうと注目されていた。

『ガンダム』と同様に考えるとまどか☆マギカ』もまた『普遍の少女』の物語のラストシーンと、『最強の魔法少女』の物語のラストシーンがそれぞれに存在するということになる。

魔法少女ものを読むための補助線をロボットアニメから引いてくることを、唐突に感じる人がいるかもしれない。

だが魔法少女ものもロボットアニメも、どちらも「主人公が身の丈以上の力を手に入れることで、社会（子供なら関与できない事件）に関与することができる」という構造を持っている。

また「エブリデイマジック」的な各話完結ストーリーをベースにしながら、1980年前後に「成長」を物語の中に取り込むことでシリーズ内で表現可能なことを深化させたという経緯も似ている。あえて極端な表現を使うならばロボットアニメは、もう一つの魔法少女ものであるとすら言えるのだ。

まどかの場合、『普遍の女の物語』の最終回に当たるのが第11話・最後に残った道しるべになる。

まどかは、ワルプルギスの夜と単身戦っているほむらを助けるため、家族で避難してきた避難所を抜け出そうとする。その時、まどかの母・詢子がまどかを引き留める。

具体的な理由を一切語らず、それでもほむらのもとへ向こうとするまどか。

「マミはさ、私がいい子に育ったって、言ってくれたよね。嘘もつかない、悪いこともしないって。今でもそう信じてくれる？　私を正しいと思ってくれる？」

この言葉を聞いて詢子は言う。

「絶対に下手打つたりしない？　誰かの為に踊らされてねえな？」

それに頷くまどか。

この時まどかの頷きは、正確に語ろうとすると「嘘だ」下手を打ったりする可能性も十分あるし、キュウベえの願い掛けされている可能性は少なからずあるにもかかわらずまどかは「うん」と応える。

この時、「傍観者」だった少女・まどかは動機を胸に秘めた主体的な存在へと変貌する。この変貌は「成長」といってもいい。

この「成長」は決して、親との単純な決別や裏切りを意味するものではない。魔法少女となったまどかの行動には母から学んだことが多く含まれているからだ。

たとえばマミは、魔法少女となるまどかの願いを知り、希望を叶えるんじゃないか、あなた自身が希望になるよ」と励ます。これは詢子の生き方について、父が解説してくれた「生き方そのものを夢にする」という内容と酷似している。

また、追いつめられていくさやかを案じて詢子に相談した時、詢子は「正しすぎるその子の分まで、誰かが間違えてあげればいい」とアドバイスをする。このアドバイスは、さやかの時に生かされることはなかったが、その後、ほむらを助けるため、あえてほむらの望まない「魔法少女になる」という「間違えた」選択をするという形で実践される。

まどかが魔法少女となる動機は、仲間の魔法少女たちの死を傍観することしかできなかった後悔と、ほむらへの友情にある。だが、その動機を実践することのいくつかまれば「倫理」は、まどかが詢子から受け取ったものだった。

第一話から詢子がワーキングウーマンであることや、まどかをさりげなく気にかけている描写を積み重ねているからこそ、まどかが受け取った「倫理」に説得力がある。

親から受け取った大切なものを実践するために親を裏切る。それはまさに「成長」というしかない行動だ。

アムロは動機を自覚する前からガンダムという力を得て戦わざるを得ず、戦いながらその動機を探り当てなくてはならなかった。エミもまた自覚なき魔法を手に入れてしまったため、魔法を使いながら、本当に自分に魔法が必要かを考えざるを得なかった。

一方、まどかは、自分の「動機」を自覚してようやく「魔法少女」になる決意をする。

ベクトルは違っていても、3人のキャラクターはいずれも「自分がなにをやっているのか」を自覚し、それによって次の一歩を踏み出すのだった。まどかは、魔法少女であるがゆえに、1980年前後から積極的にアニメの題材として取り上げられるようになった成長物語の系譜の上に位置することになったキャラクターといえる。

その点で「まどか☆マギカ」は正統な成長長編物語でもあるのだ。第11話までは。

5.「あなた」を見つめる視線の源

「この国では、成長途中の女性のことを、少女って呼ぶんだろう？　だったら、やがて魔女になる君たちのことは、魔法少女と呼ぶべきだよね」

――キュウベえ

「ガンダムの作劇で特徴的なのは、アムロの人間的成長に大きな影響を与えた敵味方のさまざまなキャラクターの存在が、実はアムロが「ニュータイプになるということを導くための描写であった、という演出意図にある。

どうしてアムロが人間的成長をとげただけではなく、ニュータイプにならなくてはならないのか、それは戦争という見立てを導入したロボットアニメを締めくくるには、個人のドラマだけでは足りず、「未来への希望」をなんらかのかたちで指し示さざるを得なかったからだろう。

結果、アムロはララァとの交感の中で、植物的なビジョンを垣間見、人類の行く末を感知する。かくして「ニュータイプという最強の戦士の物語」は、SF的ビジョンでもって締めくくられる。

第12話「おたんこ最高な友達」のAパートで繰り広げられているのは、このアムロとララァの交感と同種のビジュアル的なスペクタクルだ。まどかは、過去、現在、未来、全宇宙に存在する全ての魔女を生まれる前に自分の手で消し去ること」を願い、それによって宇宙のルールそのものを書き換えるに至る。

それは第1話の詢子とのシーンで激細されて描写された「成長」とは無関係で、ここでの描写は、デウス・エクス・マキナとなったまどかが、圧倒的な力で世界を塗り替えていく様子に力点が置かれている。

まどかは「横顔」のキャラクターだった。舞台側のスタッフは、上手下手に登場人物を配することが多い本作において、さまざまなキャラクターに横顔のカットはしばしば登場するのだが、なかでもまどかの横顔は印象的だった。それはOPで彼女が、左の横顔を見せながら画面の中を左へ疾走するカットがあったから、というだけではないだろう。

ほむらというキャラクターが、正面向きで画面手前に向かって歩いてくるという映像に象徴されるように、まどかの心配そうな「横顔」もまた、「傍観者」であるまどかを象徴していたからと印象的だったのだ。

だが第12話になると横顔よりも正面顔のほうが印象が強い。これは正面顔のカットが増えたという定量的な問題というよりもより、「見る」キャラクター「であるまどか」の実が「傍観」から「見守る」へと能動的に変化した、その変化が印象を変えたのだ。

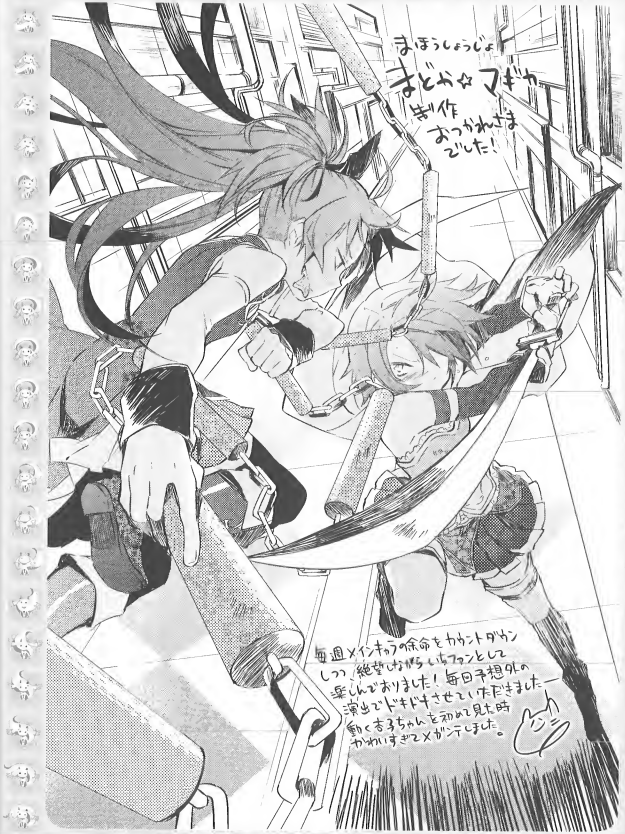
時間と空間を超えて偏在する存在になり、魔法少女を見守る「概念」へとシフトしたまどか、その視線は、彼女の使う弓矢のごとく、「あなた」を常に射抜くものでありながらも、第12話のまどかは、そのような視線の源として画面の中に存在している。

1966年から始まり、45年を経て「魔法少女もの」という「ジャンルの枠をはみ出すほどまでに広く拡散した。だが、そこにはやはり確実に「魔法少女ものの「DNAが無意識のうちに混ぜ込んでくるDNAとそが大衆娯楽の強靭さの理由であり、そして「まどか☆マギカ」の中の「魔法少女DNA」は、新たなDNAと混ざり合いながら、さらにアニメの世界、フィクションの世界へと永遠に拡散していく。

こうして永遠に伸びていくアニメという樹の大きな枝に、今年実った大きな果実の一つが「まどか☆マギカ」だった。

大きな運鎖の中で生まれた「これまでの魔法少女たちと、これから生まれてくる魔法少女たち。まどかを含む彼女たちに永遠の花束を。

MADOKA MAGICA


まほうしょうじょ
まどか☆マギカ
製作
おつかれさま
でした!
毎週メインキャラの余命をカウントダウン
しつつ、絶望に叫ばらいるファンとして
楽しんでおります! 毎回予想外の
演出でドキドキさせていただきました。
動くまるちゃんを初めて見た時
かわいすぎてメガテました。

ハノカゲ

ムラ黒江

★出張版★

みんな☆マギカ club

with ひらまつまさき

～「魔法少女まどか☆マギカ・ドラマCD」にまつわるQ&B～

インタビュアー＝QB、回答者ひらまっち＝Hでお送りします。

Illust by みげる☆マギカさん

QB：ちゃお、ひらまっち。まずは自己紹介を。

H：ちゃお。BD/DVD１巻特典ドラマCD脚本担当の平松です。

QB：キミは以前、コミケで同人誌を出していたことがあるそうだな？
特撮の評論本『蟹江敬三マガジン・あにき手帳』で間違いないね。

H：……いきなりそこから？　っていうか、Q&Aじゃなく相槌のみの『銀子の部屋』スタイル？

QB：ドラマCD第１弾は、岩上Pから、12話Cパート以降をイメージした物語をオーダーされていたらしいね。『魔法少女ほむら☆マギカ』的な、正統な魔法少女モノを。

H：魔獣がほむらの記憶を喰らって、まどかの存在を知り、魔女時代の世界に戻そうとする……みたいな感じで、全６話のおおまかなプロットを出したんですが、まあ色々あって、今の形に。

QB：打合せでは、ループ話のバリエーションで、温泉裡バトルやプール裡バトルなどのアイデアも出たらしいね。キミはドエロ人間だな、この作品でエロになんて、わけがわからないよ。

H：えっ、それは虚淵さんが……ゴニョゴニョ。でも、岩上さんと虚淵さんの提案で『OPの黒猫を絡めて、10話で駆け足だったまどかとほむらの関係を丁寧に描いてみよう』……となりました。

QB：10話の脚本も使っているし、アイデアも岩上Pからもらって、キミは何をしたんだい？

H：先生の失恋ネタを出したり、体育での事件を考えたり、エイミーとまどかのやりとりとか……
いや、誰が書いたか？ではなく、『まどか』として違和感がないかどうかが今回は大事なわけで。
ただまあ「ドラマCDが面白いなら、『かずみ』も読んでみようかな」と思ってもらえたらいいなぁと、がんばったつもりです。あ、『かずみ☆マギカ』の原作も書いてます。

QB：収録後にカットされた場面には『まどかの必殺技・フィニトラ・フレティア』もあったな。

H：「ナイショだよ！」の後に……製品ではカットされたけど、収録では生で聴けたから満足です。

QB：それで、キミはこのドラマCDに携わって、どう感じたんだい？

H：勉強になりました。岩上さんの発想も、虚淵さんのキャラの作り方も。オレはまだまだです……

QB：『まどか』の打上げでは、恭介役の吉田聖子さんとメアド交換したそうだね。

H：『劇場版・空の境界』でご一緒させていただいたんですが、憶えてくれたんですよ。こんな名もなき花のオレを……ありがとう、吉田さん！　ひらまっちは吉田聖子さんを応援してます！

QB：自分で自分のことを「花」と言うんだね、キミは。

H：うぅぅ……もう、オレのソウルジェムが孵化しそうなんですけど……

QB：今は、どんな作品を？

H：えっと、1/144の旧ザクとボンボンの作例と同じ作り方でパーフェクトガンダムを……

QB：プラモデルのことじゃない、仕事のことを尋ねているんだよ。

H：あ、そっち……BD/DVD５巻の特典ドラマCDを書かせていただきました。

QB：『フェアウェル・ストーリー』だね。シナリオは９稿まで行ったそうじゃないか。

H：苦労した分、いい話になっていると思います。まさかの新必殺技も出ますよ！

QB：『魔法少女かずみ☆マギカ』はまだまだ続くんだよね。打ち切られなければ。

H：つ……続きたい、です。そして、必ず『あの白い外道』にひと泡食わせてやるんだ！

QB：それではひらまっち、次はあすなろ市で会おう。ボクのこと、忘れないようにね。ちゃお！

H：ちゃお～！

http://hirama1002.web.fc2.com/

平松正樹

天杉貴志

ゆうきあおい

皆さんこんにちは！
マドカの中の人、悠木碧です!!

今回、このような大きな企画に
絵を描くことに関しては
すったくのドシロウトな
私を混ぜて頂けるなんて…!!
と、うれしさにガクブル(((°言°)))
今回は、大好きなシャルロッテを
描かせて頂きました♡
シャルさまかわいい。
実は『アニメ本編でも、マドカの描いた絵を
中の人が描いたものだったり…と、
この作品では、絵でも
参加させてもらえていて、
なんかうめーっ！ちわっ！
まどか☆マギカ大好き！
おつかれさまでした―(ぺこり)

私の口から余計な事を言うつもりは
一切ありません。この作品を通して
あなたが感じてくれた物…。
それが『全ての答え』です。
でもたった一つだけ…。
ほむらに出逢ってくれて、
愛して、想ってくれて、
本当に、ありがとう!!

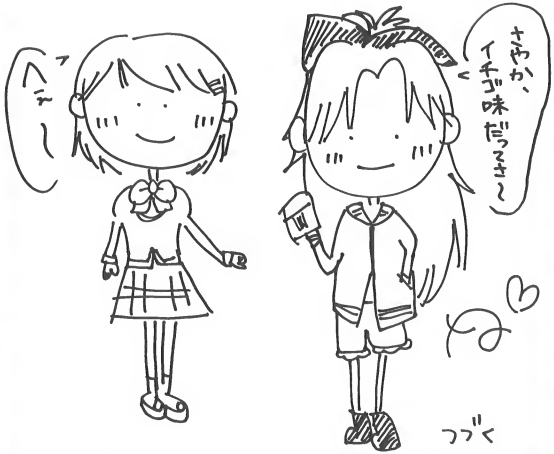
暁美ほむら

「まどかマギカ」を愛してくれるみなさんと円環の理で繋がっていられますように。 by マミさんの中の人

水橋かおり

喜多村英梨

魔法少女
まどか☆マギカ



つづく

杏子を演じさせていただけて、本当に本当にうれしかったです。
幸せものです、私。これからも、まどかマギカの応援をよろしくお願い致します!!!

佐倉杏子 役：野中藍

こうであってほしい。
キュウベえの現実。

かとう えみり

――38年目の妄言いろいろ――

虚淵玄

初恋の女性の夢を見た。

夢の中の彼女は、それこそ俺が想像つく限りの醜悪さの塊のような男と結婚し、虐げられながらも五人の子供の育児に追われていた。窶れ果て、疲れ切った虚ろな目で繰り返し「幸せです」と呟きながら、それでもなお俺が惚れていた頃そのままに綺麗な人だった。――目が覚めたときの醒たるやもう。なぁ虚淵玄よ。せめて自分が見る夢の中身ぐらい、もっと幸せなもんを用意してくれよ！

振られたときの言葉は忘れられない。当時は悔しかったが、今となってはまぁ無理もなかったなと思う。いくら照れくさかったからとはいえ、あんなにも浮ついて芝居がかった告白の仕方をしたら、そりゃ向こうも本気だなんて信じてくれなかったのは当然だ。あの頃の己の馬鹿さ加減には、今でも思い出すたびに後悔する。

あの失恋から、気がつけば3倍近い時間を生きてしまった。彼女はどうしているだろうか。せめて近況だけでも分かったらさっきの夢を笑って否定できるというのに、今ではもう何処でどんな暮らしをしているのかすら知れない。願わくば、その人生が幸福で健やかなるものであってほしい。

気になると言えば、もう一人。かれこれ10年近く消息不明な友人がいる。

思い返すだに偏屈な男だった。この世の誰よりも映画を愛し、その愛を理解できない者たちを憎悪し蔑視して、結果、

世界を丸ごと敵に廻しているかのような困った気性の持ち主だった。どうして俺こいつと友達でいられるんだろう？　と不思議になるほどヒドイことをお互い言ったり言われたり、やったりやられたり、それでもこの腐れ縁は生涯続くんだろうな、などと何となく思っていたのだが、しばらく音信不通な時期が過ぎた後、気がつけば本当に行方が分からなくなっていた。

連絡を請う手紙にも返信はなく、転居したのか、それとも無視されているのか。実家の連絡先も聞いていた筈なのに紛失してしまい、手がかりは皆無である。あそこまで社会性に欠ける男だと野垂れ死にしていても不思議はない。正直、心配である。

あの二人、今でもアニメは観てるだろうか？　「魔法少女まどかマギカ」って知ってるだろうか。

それの脚本書いた虚淵玄ってね、実は俺なんだよ。貴方の記憶に残っているか、今となってはもう定かでないけれど。かつて一度は貴方と人生が交差したことのある誰かさんなんだよ。

ああ、確かに俺は成功した。俺はいま大勢の人に褒められている。そうして賜った讃辞を受け止めて、俺はいま自分のことを誇りに思っても良いのだろう。

でも本当にそれを自慢したかった相手、認めてもらいたかった相手と、どれほど距離が離れてしまったことか。どれほど長い時が経ってしまったことか。

こんな感情、若い頃には想像だにしなかった。歳を取ってから解ること、というのも色々とあるもんだねー。

まどか

皆様、お疲れ様でした！　どうなあ、と思っても放送無理だろうなあ、と思ってシナリオを読んでいたあの頃から、もう一年以上経ってしまいました。

まだ、誰も『魔法少女まどか☆マギカ』なんて知らなかった頃から、チマチマと準備していた身としては、現在の状況は夢のようです。か・な・りの強烈なスケジュールの中、定石という定石を外して作った『まどか』ですが、全12話何とか皆様のお手元にお届けすることができました。これも、皆様の応援と、苦境をもろともせずに奮闘したスタッフの力の賜物です。今回は、そんな気持ちを一つにまとめること、ができないかと考え、制作現場からの「止めの一撃」としてディロフィナーレ本』です。シリーズ含めてみんなに思い思いの『まどか』様も描いて頂きました。本編と共に楽しんで頂ければ幸いです。しかし、キツかった。みんなキツかったんですが、私も例に漏れずキツかった。新米プロデューサーなんですから、当たり前っちゃ当たり前です。せっかくのオリジナルだし・・・・・と風呂敷を思いっ切り広げてしまい、もう自分では到底畳み切れず、というなさけない状況でございました（一つカムアウト致します。４月上旬ラスト追い込みの際、耐え切れず「大きな玉葱の下」に逃げ込みました。皆様許してください）。ポロポロではございますが、何まかしら支えて頂けたこと、とても嬉しく感謝しております。ありがとうございました！と、この文章を書いている最終話までお走らせて頂けたこと、本当に最後まで本当に感謝！で考え作業が終局を迎えつつあります。多くのスタッフと助っ人スタッフで記憶は、ここ、とこ正月にかけての１話追い込みの時間もよりうに、飽和になったからと忘れたんだと、やりがいはよは島そそで思たいう本出やく制みうまく動作ゆ思い通歌っにてしていますが、ノッてくるという、ラインが自らの勢いに乗ってはう本出やく制みうまく動作ゆ思い通歌っにてしていますが、ノッてくるという、ラインが自らの勢いに乗って、制作のダイナミズムは麻薬ですね。『まどか』はそんな制作の面白さを改めて教えてくれました。

鹿目まどかちゃん、ありがとう！

若城　忠雄

魔法少女まどか☆マギカ

ティロフィナーレ本

20110814.

cover illustration：岸田隆宏
cover artwork：劇団イヌカレー
表紙デザイン：DTP of YA
印刷・製本：リンティングイン株式会社
発行：まどか屋さん

無断転載及び複製ヲ禁ズ

よい子のみんな！ぼくと契約してティロフィナーレ!!

年　月　日

住所

氏名　　印

御契約
魔法少女
御優待券